

研究者として 教育者として

社会における自分の研究テーマの位置づけを考える

私自身も学生の途中までは理工系でした。当時の自分を顧みても、理工系院生は論理的な思考をする訓練を受けますが、研究室という狭い範囲で物事を考えてしまい、社会との関わり・繋がりを考えることが弱いように思います。だからこそ政治学研究科のジャーナリズムコース(Jコース)副専攻プログラムなどを活かして、社会における自分の研究テーマの位置づけを考える機会を作り、社会と自分の研究テーマとの関係をマクロかつミクロかつ歴史的な視点で考えることのできる力をつけてほしいと思っています。その上でさらに、自分の研究テーマや専門分野を社会に発信できる力を身に付けてほしいですね。ジャーナリズムとは、市民が自主的に考えられるように情報を伝えることです。ジャーナリズムの視点に立って市民の関心を理解した上で、自分の専門分野をしっかりとした情報として伝える能力を持つことが大事であると思います。

今後は科学リテラシーを持った人が必要とされる世の中になると思います。科学的・技術的なことを理解しているだけでなく、国や市民の意見を十分に認識した上で自分の意見を表現することが求められるでしょう。どれだけ意識していても、ミス・コミュニケーションは必ず起こるものだと思います。そのことを理解した上で、自分の話す言葉や内容から相手がどのようなイメージを持つか、を常に想像しながらコミュニケーションを取る意識が大切です。

恥を捨てて、質問しよう

Jコースの授業で見る限り、理工系学生は質問できるチャンスを自ら失ってしまっているような印象があります。ジャーナリストにとっては質問力が大事です。取材相手の方に失礼があってはいいませんが、知らないことを過剰に恥じる必要はなく、むしろ基本的なことから質問できる流れをつくり、的確な質問によって分からないことを明らかにしていく、ということは非常に重要です。自分の知らないことについて質問することは簡単ではないですし、誰もが苦しむところです。自分の専門ではない分野で、どう意見を出したり質問をすれば良いかをどれだけ考えたか、という経験の蓄積が大切となってくるでしょう。リーディングがめざす俯瞰力の習得も役に立つはずですが、ぜひリーディング生の皆さんもそういう環境に自分からチャレンジし、恥を捨てて質問することを心がけてみてください。このような訓練を積むことは、専門分野に戻りディスカッションする際にも生きてくると思います。

「技術・システム・経済」のネットワーク

新聞記者時代に、瀬戸内海の汚染問題や地球温暖化問題、森林破壊問題といった環境問題を取り扱っていたこともあり、将来のエネルギー開発に関する最も重要なキーワードは「持続可能性」であると考えています。この実現のためには、再生可能エネルギーの分野で、技術、システム、経済などのあらゆる要素でブレイクスルーが起こらなければならないのですが、これらの要素を結びつけて考えることができない社会であるのが今日の現状です。1つ1つの専門が深く細分化されているが故に、結びつけることは容易ではないと理解していますが、ここにネットワークを形成すること、それこそが「エネルギー・ネクスト」として必要なのではないでしょうか。相手の手法や意見を理解できるリテラシーを持ち、「技術・システム・経済」のネットワークを創り、今後のエネルギーに関する研究開発が展開されるべきだと、私は考えます。

(インタビュー・構成:先進理工学専攻4年 松田翔風)



瀬川 至朗 教授

政治経済学術院 教授。1954年生まれ、東京大学教養学科(科学史・科学哲学)卒業、同大学院工学系研究科中退、1978年毎日新聞に入社。社会部、ワシントン支局などでの記者活動、科学環境部デスク、同部長、編集局次長を歴任。2005年千葉大学文学部非常勤講師、2007年本学MAJESTy客員教授を経て、2008年から現職、政治学研究科ジャーナリズムコースプログラム・マネージャー。早稲田大学メディア文化研究所長。